



[illegible]

坂東

非諧小式序

誹謗者本邦之習俗勵其

來尚矣故上自名鄉鉅公

下^ニ至^ニ士^ニ庶^ニ走^ニ車^ニ諷^ニ之^ニ吟^ニ之^ニ

以攄其懷可謂盛矣想夫

斯道似輕而非輕似戲言

而非戲言矣至其淵源者

義精密而最出於高妙

然世人不知其規格信

亂道而失之平易可勝

吳スガナ哉ニ粵山ニ岡元ハ隣ニ昔ハ斯ニ道ハ

師範而ニメ下世之ナリ羣人也

其平白述作雋永無窮因
茲播揚芳譽於遐邇矣頃
編纂古今之奧蹟名曰誹
諧小式其意欲啓迪後輩
以予爲莫逆之友示之索
其序披卷閱之言近而指
遠評緻而理明實俳諧之
筌蹄論辨之模楷也於乎
人能弘道者豈謂隣耶矧
又以六義箋解斯道是補
前人所未備其功不亦大
乎可嘉可尚矣於是乎書

肯

寬文二年歲次壬寅春三
月下辭

求心子序

目錄

才一賦物事

才二各句事

本亦如諸君用候

才三各句本主事

才四各句本主事

才五各句制詞事

といひ

才六各句事

并去語

才七詞と各句事

才八切字事

才九各句事

才十三各句事

才十二各句事

才十三大知事

才十三協事

才十四各句事

才十五各句事

才十六各句事

才十七各句事

日九句め

才十八各句事

才十九各句事

才二十各句事

并去語

才二十一各句事

才二十二各句事

才二十三各句事

才二十四各句事

并去語

才二十五各句事

才二十六各句事

才二十七各句事

亦凡八篇序題曲流并附
亦充亦乃乃持持れれるるをを傍傍るる
亦三十異教通体 并四并分分事事
亦三十一六亦義義事事

追和 書物題号追和事事

小式凡例

揀撰所近身目之句上以テ和ル
評品者蓋欲ニ使人メ易曉ニ其上
意也

解以俚語者為初學設記
誦之便耳

往々引用愚句是似無類
例雖然若人來問之則無
為開未其餘蘊也非敢自
以為好矣

摘紅梅千句所載貞徳公羽
之句為批為判者世人以
翁之句知為模範而偶雖
有鄙淺之句不及參考之

又從而師之故愚錄以救
流俗同龍衣之弊若授餘子
之述作論辯筆削則恐為
其人之瑕瑾也於翁則何
哉其德輝哉
嗜誦諧之徒頃倣例而編
輯發句成書行于世有
可者有不可者後學擇善
者而從之
家傳耳提等秘蘊不略匿
者欲與眾共之

終

誦諧之和乃一休也其意ハ
古今集子起りての乃連るハ
宗祇宗長此時より其意の追和
なりとありと云ふは首句予ハ
ハ首尾をさしてハ山崎乃宗鑑
卿初に守氏乃時子初と貞徳乃
景子盛みと云くむ乃如月比々
也といふを傳へり
然るに門外立圍重於西氏正章
季吟おひる乃先輩之貞徳
然るに序の心より成別と宗通
と云く集りて云くも云くは
——人乃事と云くおひる
あれりき云く中云く非云くハ

手引 ネホリヤニサヤリ
正式乃郡山正章ハシラいひせりあり
初りる鹿集ハシラは甚しき人なり
るよきと徳ひききやつりき今
初りるるいふれ抑揚ヨクヤウ優越ユウゲツ一不
二不ふ出ると金他ニツタカの恵アツ起を以て
をれきうきよきとふとふと
はと故に余人の句上を以て難
おずや海りき今一ちふおもて
ういふるを佐おもふを批ヒ判
一付モシふ人乃句は似ニふる
何ふトウハ等類ルイきやえ乃一語ふ
なりこれふなり

の才一賤物ツツモノ

連言ツツきき山ヤマ人木路キミチやんを
五ヶやんカやんカききき唐神カラカミ垣カキ嵐ハル谷ヤ
ねやんカひくカ千チ変ヘン百ヒャク化カ乃字を賤ツツ
はるを小賤物コツツモノやんきき なるを
食りクハき山やん字ジのりききハ
賤何路連歌ツツナニミチや賤ツツはし 此心
何やん字ジき謎ナゾ乃やう形心カタココロなり
別山路スベチミチといふきい何やん字
字上はるを上賤ウヘツツやん又食り
嵐やん字ジのりき山何や賤ツツは
山嵐やん字ジい何やん字
りよるを下賤ゲツツやんきき形心カタココロは
形心カタココロをいふる賤物集ツツモノと云

をさうく肉傷やうふふふふ
ふふふふふふふふ

月夜の静けさ
今宵の静けさ
今宵の静けさ
今宵の静けさ
今宵の静けさ
今宵の静けさ
今宵の静けさ
今宵の静けさ
今宵の静けさ
今宵の静けさ

月君のちどちどおそ悲し
あふひと乃秋をいふや
あふひと乃秋をいふや
長明

長明

秋を彼千里乃 秋を
 秋を彼千里乃 秋を
 秋を彼千里乃 秋を
 秋を彼千里乃 秋を

とら乃轉入也こて之は之に於て
 賜答乃格和り

かくは橋魚我乃る。新はくを
 まる人。ふちえや。霞を宮花毒
 こねを彼。我乃の橋乃ええや
 忍を海にふれ外。まぐ事なりを。
 やい。雲をく。橋人乃。無我我
 乃橋乃ええや。まぐ人乃。霞に
 海にや。人乃。橋を恨。心を折
 へ。く。仕立。海に。ひうち。如
 く。ふ。母。く。心。く。く。成。橋に
 名。う。如。も。し。ひ。う。乃。格。ら。り
 又。声。を。り。鈴。花。も。た。ふ。ん。身。或。ハ
 素。白。を。う。ぬ。く。し。も。

はるや神祇靈地乃四方乃春

おもふ句や

夢やゆつと味奇め菊は酒

は影とらざりちん乃格と因之

又一字をぬかえは志く用もむ

これとそふよりて用やう心を

別よりて用もて伴物語

蟬乃名乃きふもあはれ乃を

女乃世乃用もむは心乃信

わいよ詩を賦にやとて古詩を

用もむ例

何人乃物づりて 根をうて

子乃人乃きふはやば八を

いふや那言那やうよやめ

どしよりてはあやういなり

古本乃句語をえ用も格とされ

これ乃とて用もむきるなり

大うこい理をゆく古人乃句を

はるやゆつと味奇め菊は酒

定家乃詞云 和房乃師通唯

以旧飲鳥師深於心古風習詞

於先達者誰人不足之哉

○才三 なる本とて事

秀乃をゆくはやういふをぬ

はるやゆつと味奇め菊は酒

きふもあはれ乃を

女乃世乃用もむは心乃信

わいよ詩を賦にやとて古詩を

用もむ例

傳テは方徳を名する人如き人
は集ミふと方徳の白をハクと
初ハジメにむとをさくとも義の帳の
面目メノはさくくわんえり酒
名人ありやのすたふさくくわん
は名をさくくわんもさくくわん又
人乃をさくくわん時をさくくわん
くわんも知れくわんも徳の真
よふかきくわんも事なるをうれ
をさくくわんくわんもさくくわん
もさくくわん集ふ入らるるを初め
とさくくわん方徳の白をさくくわん
さくくわんもさくくわんはさくくわん
るれくわん自徳心くわんもさくくわん

あていさくくわんくわんもさくくわん孔子老
子釋シヤカ述コトハ也ヤは訓コトハを云ふくわんも
管金キョウ言ゲンくわんも世を印インくわんも
くわんも事くわんもくわんも自徳チなる
くわんも思シ唯タニ今イマ定サダメぬくわんも
や名ナなりくわんもさくくわんもさくくわん
迷メくわんもさくくわんもさくくわんも
子シなりくわんも訓コトハなりくわんもさくくわんも
心シン眼ガンくわんもさくくわんもさくくわんも
○第五ゴ章シヤウは制セイの訓コトハ事コトなる
さくくわんもさくくわんも制セイの訓コトハなり
さくくわんもさくくわんもさくくわんも
さくくわんもさくくわんもさくくわんも
さくくわんもさくくわんもさくくわんも
人ヒトは訓コトハはフシさくくわんもさくくわんも

月や何処 露のふき

ほろやうー乃ー

おやの言ひし言ひしをうの言を集めて
多の制乃言やそ一冊をうづ中
みも家隆乃言おのーされとも
ひ一冊をい限るー乃を代の言
おりとも作る乃うー思入る
詞々とも思ひよる

おの言やそもある詞を

久この月 をーそや難波

何川乃山時見難なるり

何古人乃言おの足乃言お

よる詞をうれおの言や難なる

くー乃言おの言とあーれ

お八人九うーお入るー

言をゆねーおの言乃詞を

言を詞をいりひ心難緒や

言を 言なる

言を 言なる

言を 言なる

言を 言なる

言を 言なる

言を 言なる

言を 言なる

言を 言なる

言を 言なる

言を 言なる

あまのちやうそくまぐなく

おもひのこころおもひなり

あまのこころイタナクなり

いづれはよきなり

くさねのこころおしなり

あまのこころなり

あまのこころなり

あまのこころなり

あまのこころなり

あまのこころなり

あまのこころなり

あまのこころなり

あまのこころなり

あまのこころなり

あまのこころなり

あまのこころなり

あまのこころなり

あまのこころなり

あまのこころなり

あまのこころなり

あまのこころなり

あまのこころなり

あまのこころなり

あまのこころなり

あまのこころなり

あまのこころなり

あまのこころなり

あまのこころなり

ふふの乃とあもつてん^{チン}ん夢^ムを

飛鳥^{ヒツ}顯^{カケ}不動^{シツカ}

とふもれ^{スガタ}動^カれそとふもれ

實^シ乃^{スガタ}動^カれそとふもれ

鶏^ニ有三^ニ足^{ソリ}

卵^カ有^ニ七^ニ

雞^ニ乃^{スガタ}動^カれそとふもれ

揺^ニくもつてふもれ^カの足^カを^カふもれ

玉^ニ子^{スガタ}揺^カりてふもれ^カの足^カを^カふもれ

くもつてふもれ^カの足^カを^カふもれ

わつて内^ニより^{スガタ}もれ^カの足^カを^カふもれ

乃^ニ学^{スガタ}者^カれ心^カを^カ動^カれ^カの足^カを^カふもれ

あ^ニあ^{スガタ}こ^カもつてふもれ^カの足^カを^カふもれ

史^ニは^{スガタ}聖^カも^カの足^カを^カふもれ

れ^ニれ^{スガタ}も^カの足^カを^カふもれ

○オセ^ニ認^{スガタ}れ^カの足^カを^カふもれ

子^ニ代^{スガタ}も^カの足^カを^カふもれ

こ^ニれ^{スガタ}も^カの足^カを^カふもれ

生^ニあり^{スガタ}や^カた^カあり^カの足^カを^カふもれ

は^ニ語^{スガタ}れ^カも^カの足^カを^カふもれ

形^ニれ^{スガタ}も^カの足^カを^カふもれ

れ^ニれ^{スガタ}も^カの足^カを^カふもれ

れ^ニれ^{スガタ}も^カの足^カを^カふもれ

れ^ニれ^{スガタ}も^カの足^カを^カふもれ

れ^ニれ^{スガタ}も^カの足^カを^カふもれ

れ^ニれ^{スガタ}も^カの足^カを^カふもれ

れ^ニれ^{スガタ}も^カの足^カを^カふもれ

れ^ニれ^{スガタ}も^カの足^カを^カふもれ

れ^ニれ^{スガタ}も^カの足^カを^カふもれ

ち組白乃句よ 曉るに霞をま
ゐる元日

来る春をいふも思物と云ふは雨
は白を彼くも春を八重むつ
あはさるゝよりなりやいふを
下心は揺る雨は曉る事あるを
ふめづりし情もやも思者れ
おはねをいふ入珠堂なるを
これやをさるゝ乃を白れ
手はねる

○才十三 三ふん切愛句事

おはひも柳を思ふとさう風

感あはだては落きりや常則

○才十一 ちね字とめ愛句事

名うさねも柳を思ふ

あもねもやめいづくを思ふ

○才十二 大あさる愛句事

おねあさと春はれが玉つ鳴

ちさう思ふはねく斗ふさる

右三色の愛句 甚深の五傳阿

あゝもるは堪能なりてきて

あゝもははさるゝあゝも

はるゝあゝも事なれ法なり

あゝもるははるゝも借踰乃罪

乃がゝゝもあゝもれあゝも

——もあゝもあゝも

宗養より傳受乃書よ

永享年中お野方白 水手操白

然るを白よりしてこれにせしめて
無言感をもく然るをいふなり
口傳又大小の脇腹にうつるを
身傳せしなり乃口傳なり

○才十四 才三の句なり

才三才三とあるらんを免
然るをいふなり様なりなりて
あつとあるなりともしやれし
身傳の才三

春に來たりし名何の時

やとあるれあるなりなり乃
とあるなり乃能惜なりなり
わくとあるなりやとあるなり
勿論なりなり事なりなり師傳

然る人々えをあるなり又
主眼をいれた別れ事なりなり
なり乃曲を常なりなりなり
なりとありんどもなりなり
さく果^{タイキ}なりなりなり乃
三めなりなりなりなり乃
傳なりなりなりなり乃
の上なりなり事なりなり
をいふなりなりなりなり
傳なりなりなり諸^{タイ}なりなり
ふ^{タイ}なりなりなりなりなり
なりなりなりなりなりなり
なりなり

梅乃むなりなりなりなり

可全

ヨシヨ
市車也よるゝに事^{ニキ}て 信^{ニキ}梅

小や風屯也知^{ニキ}る吹^{ニキ}ぬん 昌^{ニキ}珍

何^{ニキ}もしる^{ニキ}るや古^{ニキ}多^{ニキ}と集^{ニキ}ん 正^{ニキ}交

大^{ニキ}くさる^{ニキ}乃^{ニキ}風^{ニキ}體^{ニキ}形^{ニキ}も^{ニキ}しある^{ニキ}を

めざれ^{ニキ}た^{ニキ}あ^{ニキ}と^{ニキ}し^{ニキ} 中^{ニキ}三^{ニキ}は^{ニキ}る^{ニキ}

う^{ニキ}さ^{ニキ}れ^{ニキ}ある^{ニキ}形^{ニキ}は^{ニキ}面白^{ニキ}さ^{ニキ}上^{ニキ}お^{ニキ}

乃^{ニキ}の^{ニキ}中^{ニキ}お^{ニキ}乃^{ニキ}白^{ニキ}も^{ニキ}て^{ニキ}ハ^{ニキ}ある^{ニキ}れ

光^{ニキ}り^{ニキ}あ^{ニキ}る^{ニキ}よ^{ニキ}う^{ニキ}さ^{ニキ}る^{ニキ}あ^{ニキ}白^{ニキ}形^{ニキ}

あ^{ニキ}る^{ニキ}と^{ニキ}形^{ニキ}さ^{ニキ}ら^{ニキ}り^{ニキ}あ^{ニキ}る^{ニキ}人^{ニキ}を^{ニキ}

ある^{ニキ}を^{ニキ}り^{ニキ}ある^{ニキ}よ^{ニキ}も^{ニキ}て^{ニキ}わ^{ニキ}ん^{ニキ}ハ

作者^{ニキ}乃^{ニキ}せん^{ニキ}と^{ニキ}れ^{ニキ}れ^{ニキ}も^{ニキ}あ^{ニキ}る^{ニキ}

よ^{ニキ}も^{ニキ}さ^{ニキ}る^{ニキ}を^{ニキ}あ^{ニキ}る^{ニキ}人^{ニキ}も^{ニキ}稀^{ニキ}し

ある^{ニキ}よ^{ニキ}も^{ニキ}さ^{ニキ}る^{ニキ}あ^{ニキ}る^{ニキ}よ^{ニキ}も^{ニキ}て^{ニキ}年

才十五 四白目^{ニキ}事

脇^{ニキ}乃^{ニキ}白^{ニキ}あ^{ニキ}る^{ニキ}さ^{ニキ}ら^{ニキ}り^{ニキ}と^{ニキ}も^{ニキ}て^{ニキ}あ^{ニキ}る^{ニキ}

く^{ニキ}も^{ニキ}さ^{ニキ}る^{ニキ}い^{ニキ}さ^{ニキ}る^{ニキ}あ^{ニキ}る^{ニキ}は^{ニキ}さ^{ニキ}る^{ニキ}

り^{ニキ}—^{ニキ}さ^{ニキ}ら^{ニキ}り^{ニキ}あ^{ニキ}る^{ニキ}さ^{ニキ}ら^{ニキ}り^{ニキ}あ^{ニキ}る^{ニキ}

あ^{ニキ}る^{ニキ}さ^{ニキ}ら^{ニキ}り^{ニキ}あ^{ニキ}る^{ニキ}さ^{ニキ}ら^{ニキ}り^{ニキ}あ^{ニキ}る^{ニキ}

中^{ニキ}紹^{ニキ}也^{ニキ}乃^{ニキ}傳^{ニキ}書^{ニキ}あ^{ニキ}る^{ニキ}伝^{ニキ}れ^{ニキ}た^{ニキ}も^{ニキ}

才^{ニキ}こ^{ニキ}う^{ニキ}字^{ニキ}や^{ニキ}く^{ニキ}あ^{ニキ}る^{ニキ}雪^{ニキ}さ^{ニキ}ら^{ニキ}り^{ニキ}あ^{ニキ}る^{ニキ}

や^{ニキ}と^{ニキ}さ^{ニキ}ら^{ニキ}り^{ニキ}あ^{ニキ}る^{ニキ}さ^{ニキ}ら^{ニキ}り^{ニキ}あ^{ニキ}る^{ニキ}

く^{ニキ}も^{ニキ}さ^{ニキ}る^{ニキ}い^{ニキ}さ^{ニキ}る^{ニキ}あ^{ニキ}る^{ニキ}は^{ニキ}さ^{ニキ}る^{ニキ}

連^{ニキ}房^{ニキ}あ^{ニキ}る^{ニキ}面^{ニキ}さ^{ニキ}ら^{ニキ}り^{ニキ}あ^{ニキ}る^{ニキ}さ^{ニキ}ら^{ニキ}り^{ニキ}あ^{ニキ}る^{ニキ}

を^{ニキ}あ^{ニキ}る^{ニキ}—^{ニキ}伝^{ニキ}れ^{ニキ}た^{ニキ}い^{ニキ}さ^{ニキ}ら^{ニキ}り^{ニキ}あ^{ニキ}る^{ニキ}

あ^{ニキ}る^{ニキ}さ^{ニキ}ら^{ニキ}り^{ニキ}あ^{ニキ}る^{ニキ}さ^{ニキ}ら^{ニキ}り^{ニキ}あ^{ニキ}る^{ニキ}

才十六 五白目^{ニキ}事

そとを言ふに外に事を言ふ
よは三つを能くされしを言ふ
むろりなりき故に言ふ
くぬるとは事しすべしとの
ふはてとめらんとめらふを言
三つ言ふもつとふやうは
才十七 面八句の事 才の目
をとりたる事大なるは言
自徳の十首に言ふを言ふ
一 言ふしそひらうよ

詠諧を或目し知事大なること

和漢乃とくを言ふ

和漢六言を言ふ

連言はとくを言ふ

但おやのふ言のやうに言ふ

詠諧八右めを言ふ

七句と八句の五句を言ふ

名ふは祇祇教を言ふ

述懐く旧おもて言ふ

水名を言ふ

水名を言ふ

詠三言を言ふ

詠四言を言ふ

詠五言を言ふ

詠六言を言ふ

詠七言を言ふ

詠八言を言ふ

詠九言を言ふ

二句は物をハ三句を隠し

三句は物を四句は四句は物

おとてをうてありけり

秘伝く四句は物と云ふやゆ
事れとて四句は物を五句は物を
物いふを云ふ金と云ふて云

新式より云ふ四句を云ふ

といひやうハ七句は物

連多あしを思物乃為や事詞

事や事記を云ふ一語一語

やつた云ふは九句目一語の句

と云ふより物事ハ或人難曰

連多あし十句目を云ふ事

の句に云ふより云ふ事

物と云ふ九句より云ふ事

事いふや事記を云ふ

物ハ事記を云ふ事

古人法を云ふを云ふ事

物と云ふ事と連多あしを云ふ

物と云ふ事と連多あしを云ふ

物と云ふ事と連多あしを云ふ

物と云ふ事と連多あしを云ふ

物と云ふ事と連多あしを云ふ

物と云ふ事と連多あしを云ふ

物と云ふ事と連多あしを云ふ

物と云ふ事と連多あしを云ふ

物と云ふ事と連多あしを云ふ

物と云ふ事と連多あしを云ふ

物と云ふ事と連多あしを云ふ

物と云ふ事と連多あしを云ふ

都鄙ともよきおまじし

才十八月むくの事

月あもて七の目きく二乃
より十三の目きくはむい裏
乃十三の目を定座といひられ
とも協才三才をきくすなり
うそ月きくおあむ可
月をきくくおきくたのうは
久てつる又たのうは月を結
ては事ある月を月むのうと
ひふ月を四事ともいふゆへ
むひふれ春の月むのう
座は二のうを一もこを座
もはきくそを難知のうこ

ものき青紫なりしを
少のうやうむるも三事
をきくともむるむるも
おもひくおもひくも

障子けうやうも人志

つらかりて双を打ちの事

身きりけうて棒つる

海もやれをゆきうの事
きうれう他流乃徳勝よんえ
けううしうの事も乃春を能
おききりともんえんあるふ
うしうの事むくの事能付し
きうくむ乃事付しけうの事と
やんえんむ乃事と事なれ

何處へあまたれ^{ホハシラノトナク}中極もつて

あ人をやうの^{ゼン}鑑もつて

罪人^{ザイニ}を思やあやよせぬらん

ふうろもあやうもくさんく或る山

野原形とれ景もろん乃乃上月れ

光れや乃乃字地ろもあやう

○中亦二春秋両字添字持ふ事

多とくを春の夕くれ秋乃中実

形やいふけりあういふもあや

春乃つて山 秋乃泉水もあや

も春山秋水もあやうあやもあ

も山もあやも春秋もあやうひて

景もあやうもあやあやう

りるやうも事なりこも乃^{ウチナ}景

る乃乃詞やあやあやう

やうあやうも春景といふ字は

あやう^{シヨウ}あやうも詩れ

題ふ春女恨やあやうあやう

とくもあやう^{ラニチ}あやう

詩れあやうもあやう^{イシキ}景

もあやう^{ヤウキ}景もあやう^{カン}景

あやう^ボあやうもあやう

あやう^ボあやうもあやう

あやう^ボあやうもあやう

あやう^ボあやうもあやう

あやう^ボあやうもあやう

あやう^ボあやうもあやう

あやう^ボあやうもあやう

あやう^ボあやうもあやう

あ字を夫るに候しき方ハ春
暑^{ウレハ}も方々秋やいふお鷹
さしつゝあやうきふふは千秋と
もいふあやうき春やいふ方
づつゝ思事をきき候たりて

大なる如く春乃兵法

山嶺あつてづつゝいふ

秋はけりてあえゆるに回て

あつてふ秋千のふも秋なるふ

初^{ハセ}秋よりあつて勸をる

やうなるにづつゝいふあやうき

はるもあつてづつゝいふあやうき

はる乃名人のふもあつたう

事^{ハシ}に候ふもあつたうのふもあつたう

とつゝあつたうのふもあつたう

あつたうの中へあつた事^{ハシ}に候ふもあつたう

あつたうのあつた事^{ハシ}有るに

あつたうのあつた事^{ハシ}有るに

あつたうのあつた事^{ハシ}有るに

あつたうのあつた事^{ハシ}有るに

あつたうのあつた事^{ハシ}有るに

あつたうのあつた事^{ハシ}有るに

あつたうのあつた事^{ハシ}有るに

あつたうのあつた事^{ハシ}有るに

あつたうのあつた事^{ハシ}有るに

あつたうのあつた事^{ハシ}有るに

あつたうのあつた事^{ハシ}有るに

あつたうのあつた事^{ハシ}有るに

下なるはつとありてうとあり
 やとありとありてうと品あり
 とあるとありてうとありて
 うとありてうとありて
 ザエキ
 うとありてうとありて
 うとありてうとありて
 うとありてうとありて

い乃ち乃きりあるにひて
さる一強く雪を降つ
印で百人一首たうちねづ
う乃ち乃きり電をうつ
象衣のふろ敷くぬれん
とふは物重むつとめたり
ケラチツ
らぬはみぢ子細結ば人
はこれよりなるなりとあそび
ハナメ
やつしと千白乃うめ。

又まゝに「やに」^{ヤニ}に感づ
 けり。又四小とありたり。并ゆへ
 上乃句は「とあり別」云々。又字
 形や「事」と形「とあり」也。
 むしとありあり。蓋立証。
 又「とあり」し文字上より、
 「とあり」なり。句体より、
 「とあり」事限と形とあり。形とハ逐二
 あり。はよいとあり。は、餘と準。
 である。

[illegible]

上より下へひたりや各字にりて
りよてとも。——とも決ケツしめ
詞コトバせはらよりゆへす

心乃立ゆてまことり亦不説乎
形やいふ類ちるこぞ——うじや
中しよりこぞ——きといふなり
群——とらんやち——皆ミナなり
去

ち——とち——七句まで
三字假名敷しとありや三ミラノキアラフ遍ハル折
てんねんせん形やいふよりあり
ちね字とありや二句あり

とあり形やいふなりとる者
もやいふりねあひをきき——
やうらんちんねんねんねんねんねん
字の上の字よりある字より一字

をねいふり説はれともちて説
乃字やとぬひくやゆぬ故きと
らん乃二字とぬひく同かへ様こ
るとも——

群やいふんね——ね——し
けし——やう乃三假名皆七句
連ありと面をゆへるなりや三ミラノ三
ありちりしやきおれち文字モシ

皆二句ありちりとあり五句
海と云詞二句ま志く——
見れく——ねんねん

泳ユルり工句まゆへる通えりねと
泳らん二句まゆへるねんねんねん

御んち三字うんねとを扶^{カリ}て
見^ミ海^ミ—あといふ—うんね
あ^ア海^ミなる文字ハ一字付て
二^ニうまのらんとうありあり
海^ミんとうありとあるハ形^カもさへ
ふれぬをんねとてハぬとて
る人^ニ首の中^ミ也
あ^ア無^ミ神^ミぞ—知^チとあ^ア無^ミ也
あ^アとて無^ミふ^ミ乃^ミ無^ミ—
半^ハ海^ミぞあ^アて—あ^ア無^ミ秋^キ事^ミ也と
あ^アとをんね乃^ミ無^ミ—

ふれ夜ハね無^ミハ明^ミ無^ミ 上ハ乃^ミ也
下ハをんね
雲^{クモ} あ^アて無^ミ也
もねとて 春^{ハル}乃^ミふ^ミ乃^ミ あ^ア乃^ミ也
をんね
をんねと二^ニうま

ふ^ミ乃^ミ無^ミ也 但^タ不^フ乃^ミ無^ミハ大^{ダイ}切^キ也

のち折^セ城^{シロ}もてハ不可^カ無^ミく中^{ナカ}新^{シン}
本^ホハ信^{シン}定^{テイ}今^{イマ}ハ付^ツ乃^ミ事^ミを無^ミく
ふれぬとをんねとハ文^{モン}ハ無^ミく
を去^サあ^ア乃^ミれぬハうねぬとて
あ^アて無^ミ とあ^アてハ付^ツ乃^ミ腰^{ヨコ}
あ^アてハい^イも^モう^ウ無^ミ 形^カもあ^アて折^セ
あ^アて無^ミあ^アて無^ミ故^コハ付^ツ無^ミ事^ミハ成^{セイ}
なり新^{シン}或^モハ大^{ダイ}切^キとて調^{テウ}を稀^シ
あ^アて無^ミあ^アて無^ミあ^アて無^ミい^イて
色^{シキ}もあ^アて無^ミあ^アて無^ミ字^ジもあ^アて無^ミ重^{ジュウ}
富^フあ^アて無^ミあ^アて無^ミ—
あ^アて無^ミあ^アて無^ミあ^アて無^ミ二^ニう
あ^アて無^ミあ^アて無^ミあ^アて無^ミ二^ニう
あ^アて無^ミあ^アて無^ミあ^アて無^ミ二^ニう
あ^アて無^ミあ^アて無^ミあ^アて無^ミ二^ニう

習ふ如くせん事ん如くは一字
をわかしをきく字は汝は如し
又よきことひ乃字如くせんを
とぬる事あり

久しこれ先乃字を先春は日よ
あつ心如くむ乃ちん
これちんことひ乃字上は如く
とわぬもあつ春は日よ何と
あつ心如くむ乃ち散うとん
よとづめてつりてよとん如
多むいせもれごりよ

如事ハ如をむりかむほて
はくもふ乃ちん
右一應乃てよをむりかむ

さうひはむりてハあうらん
字をりよと及乃字よとん
や文乃習ふ事よてはあつのよと
字は法よとぬるんあつて

○才六 故事用やうた
連ふやち事とこれめと物
生歌とて強ひたて定むる如と
よとぬるんあつてはあつと
とこれ一連ふやち事ととり
あつて詞を用ひは語とわん
經文如くはをむりかむ
如をあつてはあつて用ひつ
如くはくも一はくはくはく
如事ハくも一はくはくはく

うさうさうぢ川ぢぢう海えん
おのろふは依米のあづさよきて
先陣チをうれー故事コシをうてを
うく肌乃ハタうてうけやうをうて

さすううかきうくたて乃くめ
やううう泰始皇乃く神ミカリをうて
まはた太ふうかきうく雨をうて
ぢりー故事コシをうて作サを能ノ付ツ

大餘年ちりあらしを時移マシ
おシううう仙境セウキョウ乃くむめ

あうく郭盛の謡ウタは平家世をうて
大餘コトと云コト詞コトをうて平家乃
故事コシをうて二十餘年ニジュニシヨウネン政世セイセイ
やうううたううう彼都カド郭世コト五

十年乃く夢をうてあうく夢をうて
切用キリヨウうううあうく

弱き人父はむり雨をうて
これあうく楚王ソウオウ北巫山ホクサン中ナカ神女シンニョ
やうきりあうくあうくやうく
まをうてあうく暮コをうて西をうて

あうくあうくあうくあうくあうく
あうくあうくあうくあうくあうく
あうくあうくあうくあうくあうく
あうくあうくあうくあうくあうく

あうくあうくあうくあうくあうく
あうくあうくあうくあうくあうく
あうくあうくあうくあうくあうく
あうくあうくあうくあうくあうく

あうくあうくあうくあうくあうく
あうくあうくあうくあうくあうく
あうくあうくあうくあうくあうく
あうくあうくあうくあうくあうく

正也と雖づる約の秋の季
と付くもの

山寺よりわね無けりさうは天
とらきあきけりわねの宮に
あきあきとていふやうらん
ま月れ約はけりさうは天
岩よりさうはけりさうは天
さうは約とらきあきけり
はらとていふもの

をさしむるはけりさうは天

れり徳けりさうは天

異香群集を教わね場

初ハけりわねハ警けりわね

中ハ七親ハわねハ事

親ハハ詞を割 或もさうは天

さうは天ハわねハわねハ

て付くものハわねハ

親ハハわねハわねハ

梅ハ宮柳ハ鞠極不地獄

虎ハ宮柳ハ鞠極不地獄

わねハ宮柳ハ鞠極不地獄

わねハ宮柳ハ鞠極不地獄

わねハ宮柳ハ鞠極不地獄

わねハ宮柳ハ鞠極不地獄

わねハ宮柳ハ鞠極不地獄

わねハ宮柳ハ鞠極不地獄

わねハ宮柳ハ鞠極不地獄

わねハ宮柳ハ鞠極不地獄

梅様おれ名^{ミイホク}もあやめ事む
を定^{サダ}まりある名^ナもあやめ
を定^{サダ}まりある名^ナもあやめ
を定^{サダ}まりある名^ナもあやめ

あやめ事む
あやめ事む
あやめ事む
あやめ事む

あやめ事む
あやめ事む
あやめ事む
あやめ事む

あやめ事む
あやめ事む
あやめ事む
あやめ事む

あやめ事む
あやめ事む
あやめ事む
あやめ事む

あやめ事む
あやめ事む
あやめ事む
あやめ事む

あやめ事む
あやめ事む
あやめ事む
あやめ事む

あし耳をさし事と云ふ——
然る處よりさしおしりて、毫厘
のちがひ差別あり

○才成 異形通傳事 并四身

法乃るをさし如くならわ
弱よりちがひ極端に鳴りて
何れも其のや聲なり此体
のちをん氣狼あざれあき
し如く常におびこる野なり
狼ありこれ四身と云ふ
あざりきこる体なり
ハ氣狼と云ふは對をさる物を
さし理はけり方なる故に同事なり
いふせん狼なりあざれあき

あし四身と云ふはけり
ちがひなり——
けりて付物と云ふなり
信義強や唐おしききなり

目には鼻はのちをさる吸
けりて朝ハ頭は味なり
これと云ふはけりて
目や鼻や口やと云ふはけり
あをとりていふなり——
よきけりていふなり
けりていふなり——
あをとりていふなり——

春來より乃物物

むとむと人色を何うそふ

川^{カハ}山^{ヤマ}あふ山^{ヤマ}吹^{フク}のさき^{サキ}に^ニ乱^ミれ

け付やうらうらとわたり

あはれまゝいり春をやとらふ

春乃白^{ハク}えはさそふ

春^{ハル}を^ヲ秋^{アキ}に^ニ風^{カゼ}を^ヲも^モり

むら^{ムラ}な^ナ青^{アヲ}城^{シロ}船^{フネ}り^リが^ガ夜^ヨに^ニあ^あそ

と^ニ因^{イン}ら^ラ付^{ツキ}——^ニ又^{マタ}救^{クウ}無^ム法^{ホフ}師^シ

雪^{ユキ}れ^レ時^{トキ}さ^サい^イづ^ヅか^カる^ルと^トあ^あは^はれ^れま

け^ケの^ノ白^{ハク}た^タ春^{ハル}来^キより^{ヨリ}稱^{ショウ}義^ギ——

あ^あは^はれ^れり^リと^トま^また^タあ^あの^ノあ^あふ^ふ山^{ヤマ}吹^{フク}乃^ノ白^{ハク}

と^ト因^{イン}何^{ナニ}乃^ノ白^{ハク}と^トい^いふ^ふき^きま^ます^すに^ニる

魚^{イサ}う^ウに^ニは^ハの^ノ白^{ハク}と^トい^いふ^ふき^きま^ます^すに^ニる

を^をと^とり^りあ^あは^はれ^れり^リと^トい^いふ^ふき^きま^ます^すに^ニる

け^ケの^ノ白^{ハク}た^タ春^{ハル}来^キより^{ヨリ}稱^{ショウ}義^ギ——

あ^あは^はれ^れり^リと^トま^また^タあ^あの^ノあ^あふ^ふ山^{ヤマ}吹^{フク}乃^ノ白^{ハク}

と^ト因^{イン}何^{ナニ}乃^ノ白^{ハク}と^トい^いふ^ふき^きま^ます^すに^ニる

魚^{イサ}う^ウに^ニは^ハの^ノ白^{ハク}と^トい^いふ^ふき^きま^ます^すに^ニる

を^をと^とり^りあ^あは^はれ^れり^リと^トい^いふ^ふき^きま^ます^すに^ニる

け^ケの^ノ白^{ハク}た^タ春^{ハル}来^キより^{ヨリ}稱^{ショウ}義^ギ——

あ^あは^はれ^れり^リと^トま^また^タあ^あの^ノあ^あふ^ふ山^{ヤマ}吹^{フク}乃^ノ白^{ハク}

と^ト因^{イン}何^{ナニ}乃^ノ白^{ハク}と^トい^いふ^ふき^きま^ます^すに^ニる

魚^{イサ}う^ウに^ニは^ハの^ノ白^{ハク}と^トい^いふ^ふき^きま^ます^すに^ニる

を^をと^とり^りあ^あは^はれ^れり^リと^トい^いふ^ふき^きま^ます^すに^ニる

け^ケの^ノ白^{ハク}た^タ春^{ハル}来^キより^{ヨリ}稱^{ショウ}義^ギ——

あ^あは^はれ^れり^リと^トま^また^タあ^あの^ノあ^あふ^ふ山^{ヤマ}吹^{フク}乃^ノ白^{ハク}

と^ト因^{イン}何^{ナニ}乃^ノ白^{ハク}と^トい^いふ^ふき^きま^ます^すに^ニる

魚^{イサ}う^ウに^ニは^ハの^ノ白^{ハク}と^トい^いふ^ふき^きま^ます^すに^ニる

テラク

今

主工二

1

五

時々

衣工
解

121

うらあそびぞくく

あぢきやうはくくこれにちきり

さうあそびぞくくくくくく

さうあそびぞくくく

あぢきやうはくくくく

さうあそびぞくくく

さうあそびぞくく

あぢきやうはくくく

さうあそびぞくく

さうあそびぞく

あぢきやうはくく

さうあそびぞく

さうあそびぞく

あぢきやうはく

さうあそびぞく

さうあそびぞく

あぢきやうはく

さうあそびぞく

あぢきやうはく

さうあそびぞく

あぢきやうはく

さうあそびぞく

あぢきやうはく

さうあそびぞく

あぢきやうはく

さうあそびぞく

あぢきやうはく

さうあそびぞく

凡　うゝあゝ　うゝき連あゝ

人乃子れをひきき収て

津原をうり色着をう　宿花毒

毒をうり色着をう

うめ形ふととりよせもや柳髪　貞徳

こけりやう形ふとん

すゝく凡乃傳を詩を連能き

小序詞云あゝ形くそゝあひえ

うゝ形事形ふと

賦　うゝうゝ

うゝ事うゝやうゝん　あゝん　あゝん

さび　さや腰にうゝん　うゝん　吉康

とゝゝん　あゝん

比　あゝん　あゝん

あゝん　あゝん　あゝん　あゝん

あゝん　あゝん　あゝん　あゝん

あゝん　あゝん　あゝん　あゝん

あゝん　あゝん

あゝん　あゝん　あゝん　あゝん

あゝん　あゝん　あゝん　あゝん

あゝん　あゝん　あゝん　あゝん

あゝん　あゝん　あゝん　あゝん

あゝん　あゝん　あゝん　あゝん

あゝん　あゝん　あゝん　あゝん

雅　あゝん　あゝん

あゝん　あゝん　あゝん　あゝん

あゝん　あゝん　あゝん　あゝん

頌　いゝいゝ

照うめ 昔久し此秋の月
君代やこも江う川に流るるい
は六義乃ひろきや詩云連文
はふとくぎとて常き民の
云ある言域れ来と生とイキナいある
我もとびたををひづる事暇し
そのよはふありあはる人の心
あはるうとくりあるあり
そひとくさあはるうとくといふ
うとくさしとくさしとくさし
思ふありあるありとくさしとく
乃ちあり文字れとくさしとく
はふありとくさしとくさしとく
ふとくさしとくさしとくさしとく

為す如くあるや、せしむるに
けれけん、十体形と云ふる
追加書物題号之事

すぐく書物より見付く事
和後より乃右法と云く
サクイ

作意は形をせしむればぬき
を以て時をさるる形をなす
ざる金もろく源氏物語の創
をもあはれ中なる詞をとる

桐乃也

詞云

水清居のハミナ海

方をともくありけり

うきとれをきくそれを
るよにやうきまどいぬる

又や詞やととる 又鳥は也詞
あつてさやととるんや鳥やととる

心はさうかやととる 白鳥の

ひりうととるやととる

あやと詞やととる 又鳥は也詞

又四角をさるやととる 又鳥は也詞

又門 空門 亦亦空門 非亦非

空門乃四諦は法門は法ぞととる

又外き空門乃法をさるやととる

又礼は也 老子道可及乃礼

又作者は名を是ととるやととる

孟子莊子 白氏文集也と

又礼乃事をさるやととる 礼記に礼は

経に書はれととるやととる

又阿弥陀佛藥師佛如來ととる

又の徳を以て礼ととるやととる

又妙法蓮華經觀世音

これ人法喻乃三をさるやととる

觀音法ハ妙法喻ハ蓮華

また外き法ととるやととる

又妙法蓮華經觀世音

又の徳を以て礼ととるやととる

石を乃う船へうりきし船人伝
ちて曰きういふこつうちう
おきめく可船をふんはれそ
いつまふちりため傳や曰けり
器乃くちきよふ事此
うきをふんそくふき
し頃の車乃いりめと
きさふんちて曰此利器人
志めは魚くはとけり事
は小式乃むねをききり船の
句を船きりぬききりハせん曰
けりさふんふききり
おきその事ふれきりひき
けりさふんふききり

船人そふ一人乃船を船はし
きけりさふんふききり初めの
とけりうきをききり船人ハ
乃きり名ききりきりきり
事ききりきりきりきり
もきりきりきりきりきり
寛文二年初春日述き

洛下六角通

山墨元隣 又号
玄水

煮豆燃豆其
豆在釜中泣
本是同根生
相煎何太急

重恩人亦他方便
惟稱尔施得生極示



寬文十三年三月三日
末利院元禪師末孫白
西來棉標振雄風
幻出壁山不字印
今思身供放下
頌法田舟真室

